

# 民進党・前原新体制に期待する



## リーダーシップ

蓮舫代表の辞任を受けて行われた民進党代表選挙で、9月1日、前原誠司氏が代表に選ばれ、対立候補となった枝野幸男氏を含む執行体制を確立した。「民進党は解党すべき」という意見さえ聞かれる中で、新たに船出した民進党に何を求めるのか。野党共闘を進める市民運動の中心的論客、中野晃一教授に聞いた。  
(聞き手 編集部 9月12日)



**中野 晃一**  
上智大学国際教養学部教授

### 民進党の困難は 今に始まったことではない

——民進党が代表選挙を行い、前原誠司氏を代表に選出しました。新しい体制になった民進党をどう評価されていますか。

中野 蓮舫さんは辞任する必要がなかったと思いますが、さまざまな混乱がある中でご本人が辞任し、代表選挙が行われました。そのことにより、前原さんと枝野さんという、経験も豊富でリーダー格のお二人が争う形になり、最終的に前原さんが代表になりました。

前原さんと枝野さんの政治姿勢が大きく違っているというわけではありません。ご本人たちも共通していることが多いことを意識しながら戦っていたし、その点はよかったです。代表選挙となると違いが表になりました。

かつて今の段階で前原新体制がどう落ち着いていくのかを見通せないのですが、前原さんは、安倍政権を退陣に追い込むためには立憲野党との連携が必要だと承知されていると聞いていますので、今後いかにうまくまとめていくのかを注視しているところです。

### 前原代表の社民主義的スタンス

——前原代表は保守的だというイメージが強いのですが、実際はどうなのでしょう。

中野 たしかに、前原さんは、民進党の中でも改憲派、タカ派と言われ、アメリカの日本政策関係者と近い政治家という印象があります。しかし、この間の民進党の党内力学を考えるとプラスの部分もあるのは間違いありません。それは、前原さんがどういう立ち位置で党を立て直そうとするのかにかかっていると思います。

前原さんは最近小沢一郎さんとも和解をして、私はかつて自分が自分と前に出過ぎていて思い上がりがあったと反省し、まとめ役として一歩下がってやっていきたいということを行っています。

さらに、井手英策さんをブレーンにして、「オール・フォー・オー

強調され過ぎてバラバラ感がさらに出て、党が求心力を失っていきくのではないかと心配していました。その点に配慮しながら選挙戦が進められていましたし、前原さんがつくった執行体制もかなり意識しているところがあります。

民進党が直面する困難さは、今に始まったことではありません。民進党が下野した2012年以降、マスメディアは維新や当時存在していたみんなの党を「第3極」ともてはやしました。実際には自民党の別動隊であるような、右寄りの政策をとる諸政党をメディアが後押ししたことで、民主党が揺さぶられ、離党者も出れば、その支持者も奪われていくという状況が生まれました。とくに関西圏では維新現象により民進党は大きく支持基盤を失ったのですが、都議選における都民ファーストの躍

ル」というスローガンに示されるような社会民主主義的な政策を目玉として代表選挙を戦いました。

安倍政権がアベノミクスとかトリクルダウンとか言いながらも、実際には雇用の劣化が進んだり、賃金が上がらない状況が続いています。さらに高度プロフェッショナル制度を含めて混乱した労働政策を進めている中で、社会の底上げ、経済の底上げをみんなで行っていく、再分配を視野に入れて雇用を確保していくことを重視した立ち位置を鮮明にしたことは心強いことです。

ただ、みんなで再分配の果実を享受するために、みんなで負担を分かち合うという考えは、消費増税ありきの現政権や財務省に利用されかねない側面があり、その点を注意しないと野田政権の蹉跌を繰り返してしまいかねないという危険性もありますが。

ともかく、前原さんはそのような社会保障政策を掲げていますが、そのことを付け焼刃で言っているわけではありません。前原さんという安全保障政策などに目を引かれがちですが、野党時代に短い間代表を務めていた時、その後の小沢さんの国民の生活が第一路線につながる主張

共産党控室にあいさつに訪れ、志位和夫委員長(左から2人目)と握手する民進党の前原誠司代表(同3人目)左端は共産党の小池晃書記局長(9月8日/東京・国会内)提供時事

進は、その流れが東京にも波及してきたということだと思います。

民進党の基盤が「第3極」に掘り崩される危険は、昨年7月の参議院選の時もありました。田中康夫さんが維新の推薦を得て6つ目の議席を争い、そこを持ちこたえて民進党の小川敏夫さんが滑り込み、東京に維新の足掛かりを築くのをなんとか防ぎました。

一方で、参議院選が闘われている最中から舛添要一氏の辞任による東京都知事選が始まりました。私たちは、東京都において共闘が崩れるのは良くない、あるいは共闘を進めるチャンスでもあると考え、鳥越俊太郎さんを応援しましたが惨敗に終わりました。その結果、小池さんが都知事になり、さらに都議選でも東京版維新現象とも言える都民ファーストが勝利を取ってしまいました。その中で民進党がたいへんな苦戦をした。いやむしろ不戦敗と言ったほうがいいかもしれません。候補者をほとんど立てられず十分に争うことも

できませんでした。

自民党が大打撃を受けて安倍政権の混迷が深まったのはいいことですが、これまで市民や労働者が民進党や他の野党といっしょに追い詰めてきた中で、野党のふりをしたトンビに油揚げをさらわれてしまったというのが現状だと思います。

このことが影を落として離党者を誘発したりしていますので、前原代表もそのことを意識して党運営をせざるを得ないし、分断の楔を打ち込まれずに衆議院における勝利につなげていけるのか、現在の難しい舵取りになっています。

代表選と前後して、山尾志桜里議員のことが急に週刊誌に取り上げられ、スキャンダラスな形でさかんにテレビで報じられることになり、前原新体制としては厳しいスタートになっています。山尾さんは当選2回の若手で経験不足でしたが、ある種のスター性がありましたから、こういう形で傷つけられてしまったのは大きな痛手だと思っています。した